
袁家に栄光を！

三十畑紺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袁家に栄光を！

【Nコード】

N5886Z

【作者名】

三十畑紺

【あらすじ】

セプテントリオンと悪魔の襲来によって滅んだ福岡で、福岡の防衛を指揮していた一人である少女は無に飲まれる。

彼女が新たな生を受けたのは三国志の時代。袁家の当主である袁逢に拾われてからの能力を評価されて、袁家の当主を継ぐことになった彼女は、自分を支えてくれる人のため、そして何より自分のために乱世をかけることを決心し、雍州の地から暗躍し始める。

しかし、袁遺の生まれた三国志は、ただの三国志の時代ではなかった。

セプトントリオンの出現によって狂いだした世界は、あらゆる人間を無に飲み込んできた。

結界に覆われていたはずの学園。ゲートで繋がっていたもう一つの世界。結界に守られた忘れられた者達の楽園。

あらゆる世界が交差する中、袁遺は激動の三国志を終結させるべく、袁家を背負って動き出したのであった。

なんて設定の恋姫二次創作です。

主人公女性につき注意。

独自設定・解釈・ご都合主義あり。

一部キャラが性格が変わったりしていますので、ご注意を。

読み辛かったり、ご都合主義が目立ったりと多々ある駄作になるとは思いますが、暖かい目でごらんいただければ幸いです。

袁家の躍進（前書き）

新しく拙作を投稿させていただきますみそばたこん三十畑紺と申します。

拙作では御座いますが、お楽しみいただければ幸いです。

尚、拙作の主人公は女性でありますが、華琳様と同類（それ以上といっても過言ではありません）ですので、ガールズラブ要素が苦手な方はご注意ください。

また、純粹な恋姫小説ではなく、他作品のキャラも多く登場するだけでなく、オリジナルキャラも大勢おります。

ところどころキャラ紹介などで補足していく予定ではありますが、その点もご留意いただければと思います。

では、長くなりましたが、本編をどうぞ。

以後、よろしく願います。

袁家の躍進

【福岡県／博多／マリメッセ福岡】

審判の日から既に四日。東京・大阪・札幌・名古屋・博多・広島……。日本の主要都市から地方都市に至るまで、報道機関などを含めた、一般人が手に入れられる情報網は壊滅し、今までそこにあったと奇跡のような日常が、儚くも崩れ去った日から、既に四日が経過していた。

福岡のシンボルでもあった福岡タワーが初日に倒れて以来、徐々に福岡県の面積が狭くなっていることを、一般人は知らなかった。そもそも、戦う力のない一般人が、昨今で生き残れる見込みはない。四日目ともなれば、生き残っている者は殆どが一般人の枠からは大きくはみ出していることを言うまでもない。

生き残っている人間は、もう数えるほどしかない。ジプス福岡支局が手に入れた情報は、生存者の心をずたずたに引き裂いたと言っても過言ではないだろう。

札幌の生存者はゼロ。名古屋・大阪・東京は被害が甚大で、大分や広島にいたっては、既に地図には存在しない。日本海を隔てた先には、滅んだ大陸が寝転がっているだけだ。福岡市内には、この世に存在するはずのない生物達が跳梁跋扈しており、屋内屋外を問わず、放置された一般人の亡骸が点々としている。

福岡は、正しく生き地獄になっていた。ジプス福岡支局を束ねていた臨時の支局長も、先の襲撃で命を落とし、暴徒と化していた福岡市の市民も、既に生き残りはいない。マリメッセ福岡まで撤退してくる間にも、何人もの悪魔遣いがその命を散らしていた。

「……嘘でしょ？　ここまで来て袋小路だなんて……！」

マリンメッセ福岡の内部は、既に侵食が進んで半分以上が無に帰していた。入り口付近には、既に彼女をここまで追い詰めた悪魔が密集している。

全門の悪魔、後門の無。既に退路は無いに等しい。彼女の人生は、ここで積みなのだ。

「戻りなさい、ケルベロス、スレイプニル！ ……最後くらい、一緒に休みましょう？」

彼女をここまで守護してきた、彼女の使役する仲魔。ケルベロスとスレイプニルは、周囲を取り巻く悪魔共より強力なものではあるが、所詮、多勢に無勢であった。

流れに流れ着いて、風俗店で働いていた彼女ではあったが、通っている大学も、この近辺ではトップレベルだったし、運動神経も通っていた高校で一位二位を争っていた。だからこそ理解できるのだ。これを覆す手立ては無い、と。

「さようなら、福岡県。さようなら、この……世界」

そして彼女は、無に向かって倒れこんだ。無は無常にも彼女を飲み込んでいく。後に残ったのは、獲物を無くして帰っていく悪魔の残党と、無音の空間のみである。

奇しくも、次の日にはジプス東京支局から何人かが福岡に乗り込んでくることになったのだが……。四日目の段階で、福岡県は壊滅した。

ジプス福岡支局を、ひいては福岡の防衛を一途に託されていた天才大学生の死をもってして。

無人の廃墟も、やがては無の空間に飲み込まれることだろう。そのほかの地域と同様に。

【洛陽】

袁逢が、身元不明の幼子を拾ってきたのは、彼女の第一子である袁術が生まれる数年前の出来事だった。

当時、幼子の周りには、気品の高そうな白馬と、獐猛そうな番犬が佇んでおり、周囲には、幼子をかどわかそうとしたのであろう賊の遺体が転がっていた。

袁逢はそれを天命として捉え、害意が無いことを番犬に示しながら、幼子を屋敷に連れ戻った。袁逢の後ろには、馬と犬が、ぴったりと着いて来たのである。

それ以来袁逢は、幼子に袁遺と名付けると、実の娘である袁術の姉として、大事に育ててきたのである。成長するに従って、袁遺の才覚は開花し、名実ともに袁家の時期当主となることは、誰の目にも明らかにになっていた。

「袁遺様。この度は、袁家当主就任、本当におめでとうございます。董家を代表して、お祝い申し上げます」

「……袁遺様。曹家としても、曹孟徳としても、心よりのお祝いを申し上げます」

「月も、華琳も、仰々しいわね。普段からの付き合いなんだから、もっと軟らかくしてもらって構わないのに」

洛陽にある袁遺の屋敷では、袁逢から袁遺に、袁家当主の座の引継ぎが行われていた。参列するは、袁遺と関係の深い董卓や曹操、遠くは西涼の馬騰や幽州の公孫賛、南陽の孫堅とそうそうたる顔ぶれである。皇帝の直属の部下も参列し、大將軍たる何進も、祝いの席には参加していた。それ以外の面子では、名門と言われる家のうち、荀家、司馬家、陸家が参列していた。水鏡女学院を筆頭に、名

だたる私塾もこの祝いの席に参加することなり、袁遺の屋敷は久方ぶりに、異常な賑わいを見せていたのである。

とはいえ、袁家が如何に名門であろうと、これほどに大規模な祝宴が行われることは無かったことだろう。

雍州の刺史に任命されることとなった袁遺に取り入り、あわよくば良い関係を掴もうとする人間も多く存在していた。袁家の当主といえ、その莫大な財産と兵力で、都の中核を担っていくことになるだろうことは誰からでも明らかなことであった。

袁遺を拾ってきてからと言うものの、袁家の株は上昇しかしていない。まだ幼かった頃の袁遺の献策は、大人である袁逢を唸らせ、国の政治を良い方向へと導いていたのだ。

「……はあ、雍州の刺史か。と言っても、私の直属の部下なんて、妹の美羽と付き人の七乃くらいなんだけど……」

その一方で、雍州の刺史に任命された袁遺には、直属の部下は余り多くはいない。田豊や顔良、文醜、審配などの袁家に仕える者は、冀州に務めることになる、従妹の袁紹についていくものが多い。彼女達も、袁紹よりは袁遺に仕えたいと思うが、元当主からの厳命では背く事も出来なかった。袁遺自身も、袁紹一人で冀州を任せようものなら、冀州が滅びてしまうのではないか、と考える人間の為、早い段階で納得していた。

「……人材登用だけ考えないとね。月は私に下るそうだから、彼女達にも働いてもらうとして」

袁遺にとって、目下の課題は、人材不足である。給金はいくらでも払えるが、払う相手がいないのでは意味がない。そういったことも考えて、今回、袁逢と袁遺は、ここまで大規模な祝宴を開いたのである。

その結果は、大成功の一言に尽きるだろうか。

「荀家より、荀？と申します。人材をお求めとのことですので、是非、娘をお使ください」

「私は司馬防と申します。この娘を、どうかお使い願いたいのです」

「陸家の陸駿と申します。是非、娘の智をお役立てください」

「水鏡先生の下で勉強に励みました、諸葛亮と申します。どうか、私を末席に加えてはいただけないでしょうか？ ……あう、囁んじやった……」

袁遺が今回の祝宴で雇った人物は、以上の四人であったりする。仕える相手こそ異なれど、その全てが、天下に名を轟かせるほどの人物である。しかも、刺史という立場上、不足することが許されない文官である。彼女は、四人が自己紹介を終えるとともに、採用の旨を伝え、曹操、孫堅、馬騰とは相互協力の関係を結ぶこととなった。

公孫賛は、袁逢からの必死の頼みで、袁紹と協力していくことが決まったのである。

【雍州・天水】

先の祝宴から一週間、袁遺と董卓の一団は、雍州を治める為の政庁が存在している天水にやってきていた。長安や天水は、董家が治めていただけあって、比較的治安も良いが、西涼の馬騰と同様に、異民族の侵攻が多々ある地域であった。

「この地域は羌族の侵攻が多いわ。特に、羌の都市と隣接しているここ、天水は最前線といっても過言ではないわ」

「羌族は、悪い奴らじゃないんやけどね……。ただ、羌方面での早魑が原因での不作が原因で、狼藉の為に侵攻するのが多いみたいや

な」

「実際、天水の西ではそれなりの被害が出ています。至急の対策が必要なのですが、私ではどうにもなりませんでした……」

刺史である袁遺の直属の部下になる、天水の太守である董卓とその配下。彼女達を含めて袁遺の配下は優秀どころが集まっていた。

武官には、元董卓軍の張遼、華雄、呂布。文官や軍師には、張勲、諸葛亮、司馬懿、荀？、陸遜と董卓、賈馱、陳宮。武官が少々心もとないわけだが、それぞれが一騎当千の働きをする武官である。それに加え、文官が少ない西涼の馬家とは相互同盟を結んでいる為、足りない武官を馬家から、文官を袁家から補充しあうことで人材不足を解決していた。

「……取り敢えず、区画整理と戸籍、農業の充実は必須ね。特に、馬だけでなく家畜も含めて……そうね、混合農業を発達させましようか」

「区画整理や戸籍は理解できますが、混合農業と言うのは……？」
「畜産と農業を組み合わせるってことよ。飼料作物の栽培も可能でしょう？」

到着早々に内政に着手し始めた袁遺は、董卓と賈馱、陳宮には区画整理と警備隊の再編。荀？と陸遜には、混合農業を発達する為の下準備として、現状の農業収支報告書の作成。張勲には天水の戸籍作成を命じ、司馬懿には人材登用を命じた。天水は彼女にとってもお膝元にあたる為に政務が滞ることは無いが、長安と安定には、別の人材を送って政務に当たらせる必要がある。異民族の来襲や刺史としての政務を行う為には、元董卓軍のメンバーや新規参入組の文官を送り込むことは、現状の段階では出来ないのである。

「霞、天水の常備軍の訓練を進めなさい。異民族以外にも対応でき

るように、騎馬隊を増やすから、優秀な兵士を将に抜擢すること。
恋は弓兵隊の訓練を進めること。副官には、あなたが優秀だと思っ
兵を抜擢しなさい」

「任せとき！」

「……分かった」

武官の張遼と呂布には、この地域の主力となり得る騎馬隊と、そ
の騎馬隊に対応できる弓兵隊を中心に訓練を進めさせる。更に、兵
士の中にいる優秀な人材を将として取り立て、将の層に厚みを持た
せる必要がある。

曹操こと華琳とは、友好的な関係を築いてはいるものの、袁家は
最終的に曹操に滅ぼされる可能性がある。彼女よりも強力な軍を、
徐々に作っていかねばいけないだろう。

何より、ライバルである彼女に負けたくはないという、個人的な
理由もあったのだが。

「……お嬢様、私達はどうすればよろしいのでしゅか？」

「大丈夫、あなた達には私の補佐と護衛を頼むわ。孔明、武官・文
官の登用試験を行うから、天水、長安、安定……それと、羌にもそ
の情報を流しなさい。これからの時代、異民族だからと蔑む時代は
終わっているわ。優秀な人材に、身分は関係ないわ」

「御意！　すぐに準備を行います！」

諸葛亮を動かして、一斉試験の準備を行わせている間にも、袁遺
には色々とやることがある。都市内部の警邏、都市内での陳情処理。
都市内部を歩き回ること、気付くことが出来る問題もある。汝南に
いるときに擦り寄ってきた周りの人間が私腹を肥やすことにしか興
味が無いような連中であつたが故に、袁遺にはその辺りはよく理解
できているのである。

そして、そのような環境にあつたが故に、彼女は人の心に敏感で

あった。先に雇った四軍師が彼女に信服を誓っているわけではないことも、とうに気付いていたのである。

だからこそ、彼女は四人に見せ付けなくてはいけない。彼女が仕えるに値する主であるということ。

「お嬢様、この天水の街を見て、どうお考えになれますか？」

「月が治めていただけあってしっかりしているわ。ただ、少しだけ活気が足りないわね」

「……異民族、でしょうか？」

「いいえ、怖いのは異民族ではないわ。……恐ろしいのは、侵略者。漢民族も異民族も、等しく民には違いないでしょう？」

警邏の途中で自身の身辺警護を行っている華雄に尋ねられた袁遺は、あっさりとそう答えてのけた。彼女の出身は異民族だそうで、貴賤を問わない董卓が、その实力を見込んで登用した将である。だからこそ、彼女には袁遺の言葉が嬉しかったのである。

「月様にも託してはおりますが、私の真名、葉をお預けします。……ですが、公式の場合などでは何時も通り、華雄とお呼びください」
「……分かったわ。私の真名は天音。好きに呼んでもらって構わないわ。それと……無理して敬語を使わなくても構わないわよ？」

「そうは参りません！ 月様が忠誠を尽くすお相手です。この私が敬語を使わない道理などありませんので！」

嬉しそうに応える華雄に、袁遺はそれ以上何も言うことはなかった。

天水に、ひいては中華大陸を巻き込む暗雲は、未だ立ち込めたばかりである。

世間を賑わす天の御遣いの噂。そして、終末の予言。警邏による収穫はあったと、袁遺はどことなく浮かない顔で政庁へと戻ってい

った。手には、かつて使っていた、今では動かない携帯電話。ケルベロスとスレイプニルを連れている彼女には、確信があった。いつか、これをもう一度使うことになるだろう、と。

袁家の躍進（後書き）

初っ端から人材チートと思われるかもしれませんが、この時代に現れている他の将を考えると、これでもチートになっていないと申し上げておきます。

主人公である袁遺（伯業）ですが、転生者であるが故に未来の知識を持っていますが、そのアドバンテージもそこまで長くは持ちません。

他の転生者はどんな人材がいるのか。次話では、幻想郷からの転生者を数名紹介いたします。

それでは、また次回にお会いできれば幸いです。

袁遺に仕える者の思惑

【雍州・天水・練兵場・昼過ぎ】

天水の練兵場では、馬家から派遣された武官の一人である馬岱が袁遺と打ち合っているところだった。呂布や張遼、華雄に呂布の抜擢してきた將軍でもある高順などでは袁遺の打ち合いの相手には強すぎる為に、馬岱との打ち合いを優先していた。

馬岱としても、馬騰や馬超などが相手では満足に打ち合うことも出来ない為に、渡りに船であった。

「うう、お義姉様ってば、どうして傘なんかでたんぽぽと打ち合えるのさ……」

「この傘は特注……ってことらしいからね。どこかで見たこともあるものだから、この前行商人から買ったのよ」

「傘は武器じゃないのに……」

そんな馬岱にとって、一つだけ不満な点を上げるとすれば、袁遺の得物がややピンクがかった、白色を基調とした傘である、といことだ。その容姿も相まって、袁遺が傘を差して佇む姿は、さながら深窓の令嬢に見えることだろう。

そんな、本来であれば武器に向いていない傘で、自身の得物である片鎌槍と打ち合わせられるのは、少しばかり不条理に感じるものだった。

ついでに言えば、袁遺の傘は、この時代にしては珍しく、骨組が鉄で出来ており、布がその表面を覆っていた。だというのに、自身の武器が布の一枚も破れないというのが馬岱にとっては信じられなかった。

「このままじゃ、たんぽぽだけ置いてけぼり食らっちゃうんじゃないの？」

「そんなことないわよ。私は蒲公英が馬超のようになりたいのなら協力するし、馬超とは違った形で活躍したいのならば、それに見合った戦場を用意するだけよ」

「お姉様みたいな脳筋にはなりたくないなあ……。まっ、たんぽぽはお義姉様の副官をやっているのが一番楽しいからいいんだけどね」

そんな馬岱が、天水の練兵場で打ち合っていた理由は、それであった。侵略を行う異民族の掃討作戦で、馬家と袁家は共同戦線を張るにあたり、先遣隊の一人として、馬岱が派遣されたのだ。馬家の主力は、馬騰や馬超、それに？ 徳である。馬岱は予てより馬超の隊の副官を務めていたが、今回は大規模戦略に加え、袁家の軍師が副官と入ることが決まっていた為、隊にあぶれていたのである。

袁遺は、馬岱のことを、知恵の回る智将の素質があると見ていた。諸葛亮や陸遜、司馬懿との知恵比べを行わせてみたときでさえ、受ける被害をできうる限り少なくしていたからだ。馬岱からしたら、惨敗もいいところだから褒められることもないと考えていたようだが、袁遺や諸葛亮は、その才を見落としてはいなかった。

袁遺隊の従軍軍師である諸葛亮だけでは、戦場全体をもカバーする必要のある状態では、上手く隊を纏め上げることが出来ないのも、また事実であったがため、馬岱を教育して、副官として育て上げてしまうこと。それが、諸葛亮と袁遺の思惑であった。

「……今日の鍛錬は以上でお終いにするわ。近いうちに、羌族の侵略部落への侵攻戦が行われる。それまで、今まで以上に厳しい訓練を賭すわ。誰の為でもない、自分のために。自分が生き残る為に、今の苦労は甘んじて受けること。それが出来る者は、長生きできるはずだわ」

袁遣は、さきほどまで得物にしていた傘を日傘として使用しつつ、優雅な仕草で兵へと語りかける。副官である馬岱もまた、袁遣と並び立ち、得物の片鎌槍を地面に刺す。

「蒲公英、あなたからみて、今日の調練で一番の動きを見せていた隊はどこだったかしら？」

「3番隊だったよ、お義姉様」

「……なら、3番隊にはこれを支給するわ。城下で使える割引券をね」

これには、袁遣隊の面々から歓声があがる。それもそうだろう。袁家軍では、各隊で一番の動きをしたものに、時折特別褒美が与えられるのである。

城下の商店には袁家から毎月の収入を納める代わりに、特別割引券を持つものには、一枚につき10%の割引として使用できるようになっている。その用途は書物や食事以外に、武器、鍛冶、酒屋とあらゆるところに及んでいるのも、兵士のやる気を引き上げるのに一役かっていた。

それに加えて、この政策は割引を強要されるはずの商人からの人氣も高かった。彼らにしてみれば、割引を行っても利益が出るだけの収入を得られるだけでなく、袁家という巨大な名家とのつながりをも持つことができるのである。商売も活性化をするだけでなく、なじみの深い将兵は、時折用心棒代わりに勤めてくれることもあった。

こうして将兵と庶民のつながりが深くなることによって、警邏中の庶民からの差し入れも見えるようになっていたし、困っている庶民へ、将兵が無償で、進んで手助けをするようになっていた。

天水は、ひいては雍州は、この大陸で最も住みやすい街である、などという噂は、瞬く間に広がり、太守による圧政に苦しんでいる民は、新天地を求めて移民を始める始末であった。

「それじゃ、蒲公英。今日も街で食事にしましょうか」

「うん、お義姉様！」

「まっ、待ってください、お嬢様！ 私も、わたしゅもお昼ごはんにするのでしゅ！」

「置いていかないから、少し落ち着きなさい。お城の前で落ち合いましょうか。蒲公英も孔明も、それでいいかしら？」

「はいっ！」

大陸の恵まれない人々が、自由に過ごせる新天地。庶民からは最も離れているはずの、名門袁家の当主・袁遺と天水・雍州の民の距離はきわめて小さいものである。

民の平和と生活を守る仁君でありながら、夢想家ではなく、現実をしつかりとわきまえる。高官や他の地域の太守の話だけに限らず、貴賤を問わず真摯に意見を受け止めるその姿勢。その辺りが、袁遺の魅力なのだと、諸葛亮は考察する。

優秀だが苛烈な曹操や孫堅。家柄だけで、実体の伴わない袁紹。治世は得意だが猜疑心の強い劉表。いずれも、確かに一角の勢力になるであろう存在ではあるが、諸葛亮の目指す天下を為すには、袁遺に仕えるのが一番の道である、と、諸葛亮は最近になって思うようになっていた。彼女こそが、自身の描いた理想の君主なのである、と。

私も彼女の魅力に中てられたのか、と諸葛亮は苦笑を浮かべるが、ここが心地よいのもまた事実。

諸葛亮には、一つ大きな確信があった。やがて、大陸は巨大な乱世に巻き込まれる。だからこそ、自身の夢を体現してくれる主に仕えたいと思っていたのだ。その点、袁遺は申し分ない存在だった。諸葛亮の目指す世界と、袁遺の目指す世界は、どこか重なっているのだ。

「あ、そうだったわ。孔明、これ……、今月の新刊よ」

「あ、ありがとうございますしゅ！」

……決して、諸葛亮は、袁遺の著している艶本につられたわけではないのである。

【雍州・天水・農業区域・昼過ぎ】

荀？と陸遜は、袁遺の命令の元、天水外れにある農村地区を訪れていた。文官二人で行動をするわけにもいかない為、彼女達の護衛をしている呂布とともに、である。

「……小麦を栽培する面積を増やしたところ、こんなにも変わるものなのね」

「最近では、羌族の一部がこちらに移住して、混合農業を始めていますね」

「そのお陰で、羌の一部の部族からは馬も購入でき、軍の層も厚くなった。それに加えて、税収も安定化……か」

「流石は、袁家の再興の象徴ですね。正直、伯業さんの能力を見くびっていました」

王佐の才と、後の呉の大都督は揃って感想を漏らしていた。確かに、以前から混合農業に近い農業形態は、一部農村で実施されていた。しかし、家畜の排泄物を肥料として用いたりするやり方は、当初は反対派が多数だった方法ではあるが、今年の豊作を喜んだ多くの農村で取り入れられていた。

それに加えて、袁遺が提示した連作障害の情報も、多くの農村でそのまま受け入れられた。連作障害については、その成果の如何が出るのはまだ先の話になるだろうが、過去のデータから、間違いではないことを彼らは経験として知っていた。

「作付け面積からの税収ではなく、土地を単価として見たときの税収だなんて、普通は考え付かないわよ」

「いえ、それは違いますよ、文若さん。私達はあ、思いついたとしても、それを行動に移せないんですよ？　過去にそういう事例がありませんから」

「……確かに、普通は年毎に必要な分を取り立てるものね」

農業面以外で、荀？と陸遜を唸らせたのは、税の徴収方法である。後の日本で行われる地租改正と同様に、土地に税をかけて、一定の税収を得るとともに、消費税として、通常の商品に対して、5%値段を上乗せさせることとしたのだ。

最初こそ、小さな混乱が続いたものだが、値段が一本化されれば、直ぐに民衆もそれになれる。後は、月の最後に、売り上げの5%を国に納税させることで、庶民からの税としたのである。

「消費税って言ってたわね……。兵や將軍、私達のような文官や軍師、更には伯業様ですらも、ものを買うときには税を納める……。」

伯言はどう思った？

「多分、文若さんと同じだと思いますよ？　庶民からお偉いさんまで同じ規則で税を納めているのだから、文句も出ませんし……。税収が安定したことで生活も向上するわけですから、不満がたまることもないはずですよ」

「……確かに、ここまで治世の器を見せ付けられると、もっとその治世を見てみたい、って思うわよね」

袁遺は、董卓に命じて、信頼できる政務官を税収調査の職に任じ、粉飾を行っている店がないかどうかの調査を行わせ、警邏隊にはそれに伴う問題がないかどうかをチェックさせている。今後、文官が増えれば所得税などを追加して税収を増やし、より高度な政策へと

シフトさせていく予定なのである。

職業紹介所の設置、町役場の設置など、袁遺はかつての知識の一部を駆使しつつ、出来うる限り過ごし易い都市を目指していたのである。

そのいずれの政策も、この時代に過ぐす文官であれば、目から鱗の政策である。そして、優秀であるが故に、彼女たちは思うのだ。もっと、新しい政策を見てみたい、と。

「伯言は、このまま袁家でお世話になるつもり？」

「孫堅様からも勧誘の旨をいただいてはいますけれども、此方が私にはいい環境ですね」

「……理由を聞いても？」

「簡単なことですよ。私としても、袁遺様の目指す国を見てみたいというのが一つ。環境面では、『必要な書物があれば、袁家が無償で調達する』という点が、流石は名門だと思えますね」

「……図書館では、例の性癖があるからってところね」

「お恥ずかしながら。……なので、必要な書物に関しては、自室で保管しても良いなんて好条件を出していただけると、気兼ねもありませんし、何よりも……私の能力をとっても高く評価していただいているようで、嬉しいんですよ」

陸遜が袁家に高評価を持っているのは、それが理由であったりもする。江東の虎と恐れられる孫堅の下にも周瑜がいるが、袁遺が諸葛亮、陸遜、荀？、司馬懿などの筆頭文官、軍師、將軍職に与えている特権は非常に大きい。

仕事に必要な物であれば、何でも無償で手に入れてのける点でも、それは理解できるだろう。天水には当然、図書館も存在するのだが、そこにある書物であっても、彼女達が欲しがれば写本を即座に作らせ、一人につき一冊行き渡るようにしているのだ。

それに加え、陸遜は自身の特殊な性癖を、袁遺に受け入れられて

いると言うのも大きかった。

以前に袁遺が陸遜の部屋を訪れたときに、発情していた陸遜は主である袁遺を欲望のままに襲ってしまったことがある。結局、攻守は逆転したわけだが、袁遺は陸遜のその性癖をも受け入れた過去がある。

陸遜としても、『性癖一つであなただを追放して、何の得があるのかしら？ あなたほどの優秀な人材だったら、他の何を代償にしても手元に置いておきたいわ』などと言われれば、満更ではないのである。

「そういう文若さんは、袁家から出奔するつもりなのですか？」

「元々、陳留の曹操様を主に立てようと思っていたんだけどね。河北袁家に仕えていたら、間違いなく出奔していたんだけど……」

「今は出奔するつもりはない、ということですか？」

「伯業様に『我が子房』とまで称されては、嬉しくないはずがないでしょ？」

「前漢の張良になぞらえて、ですか。それは、私も言われてみたい言葉ですね」

荀？が袁遺に言われた言葉は、彼女の心を掴んで離さなかった。元々、同性愛の気がある荀？は、その筋でも有名な曹操への推挙状を、曹操の親友でもある袁遺に書いてもらう予定であったのだ。

しかし、袁遺は荀？の想像以上に、自身の理想に近かった。曹操であれば、自身を様々な意味で可愛がってくれることは簡単に予想がついたのだったが、袁遺がその上を行くとは思っていなかったのである。

袁遺が天水に居城を構えてから数ヵ月後、曹操が袁遺を訪れた際に、荀？は曹操に美味しくいただかれたことがあった。その際に、袁遺には手を出したのか、と荀？は曹操に尋ねたことがある。荀？との情事の際には、曹操のサディストっぷりが、受け気質な荀？に

は眩しいほどだったのだ。

しかし、曹操が返したのは荀？の想像だにしない事実だった。曰く、『私が手を出したんじゃないわ。誘ったのは私だけど、襲ってきたのは天音』と、顔を赤らめて教えてくれたのだ。

「……伯業様あ、今日も私を激しく襲っていただけないでしょうかあ」

「私も大概だとは思いますが、文若さんも、性癖は大概ですよねえ……」

曹操の上に行くという袁遺との情事を想像して、体をくねらす荀？を見て、陸遜は一つだけ大きな溜息を漏らす。

隠れて艶本を好んでいる諸葛亮。本に欲情してしまう陸遜。一日の終わりに、袁遺の足を舐めさせてもらっている荀？。

この軍にはまともな文官っていないのかと、陸遜は自分を棚にあげて思ったりしてしまう。

だが、一つだけいえるだろう。大義や人望など惹かれる部分も多いが、結局最後に物を言うのは、自身の欲なのである。仕えるべき主は、自分の目でしっかりと選ぶ。それは即ち、自身の望む主君像を、欲望のままに選択すると言うことなのだから。

……つまり、陸遜も荀？も、色事を優先させたわけではないのである。

【雍州・天水・会議場・夕刻】

「お姉ちゃん、天音様からお願いされた仕事って……？」

「何でも、悪徳官吏の一斉摘発を行うらしいですよ？ 地盤を固めて一年経った今、摘発を行っても、政務に問題がないレベルまで持ってきましたから」

「ふーん……。でも、お姉ちゃん？ 司馬懿は横文字を喋らないはずだよ？」

「……そうでしたね。もう数十年も経つというのに、未だに慣れませんね」

司馬懿と、司馬懿によって推挙されたその妹の司馬孚は、天水の会議場を訪れていた。将の登用を命じられた司馬懿は、郭淮、鍾会、艾などを登用しており、諸葛亮には、天水の学問所で学んでいた姜維を弟子入りさせている。

一通り文官と武官の補充に成功した司馬懿に、袁遺は悪徳官吏の一掃を命じたのである。その理由は、司馬懿の秘密にある。

「小石、官吏の心を読むのは私がやります。あなたは、私の様子を見てリストを作成しなさい」

「うん、お姉ちゃん。私達の秘密を知っても変わらずに接してくれる天音様の為にも、失敗できないからね」

「……そうですね。心を読むことが出来る私達を知っても、迫害もせずに傍に置いてくれている。一族からも厄介者にされた私達を……。それだけでも、天音様には感謝しないといけませんね」

「昔は、人間からも、妖怪からも迫害されて、地下に逃げ込む破目になったのね。もっと前に、天音様に出会いたかったなあ。そうすれば、私も第三の目を閉じなくても良かったのに」

「でも、その代わりにあなたにしかできないことも生まれたじゃないですか。だったら、今の力を持って、天音様を支えなければいけませんよ？」

司馬懿と司馬孚は他の人と比べて特殊な能力を持っている。姉の司馬懿は、人の心を読む読心力を、妹の司馬孚は、他人の無意識の隙間に入り込み、自身の存在を気付かせなくする能力を。

特に、司馬懿の持つ読心力は、他人には非常に疎まれる能力であ

った。その能力ゆえに疎まれ、一族でも厄介者扱いだった二人は、初めてその力をも認めてくれた袁遺には、当然のことながら真名を許している。同時期に加入した四人組の中で、最も早く、袁家に骨を埋める覚悟を決めたのである。

司馬懿、その真名を覚。司馬孚、その真名を小石。

かつては、幻想郷で地下の邸宅、地霊殿に居を構えていた妖怪、古明地姉妹である。

「幻想郷の滅亡は呆気なかったけれども、人生悪いことばかりじゃないんだね」

小石が言うように、幻想郷は既に滅亡していた。と言うよりも、彼女達は転生したに過ぎないのだ。日本を、世界を蝕んでいたセプトントリオンによる侵攻は、結界によって隠された幻想郷をも飲み込んだ。幻想郷の龍脈の中心となっている場所を、全て失ったことが原因である。

紅魔館、白玉楼、永遠亭、守屋神社、明蓮寺、地霊殿、天界、そして博麗神社。幻想郷の強者達は、セプトントリオンと暴れまわる悪魔に敗北し、やがて、結界もろとも無に飲み込まれてしまったのである。

司馬懿と司馬孚……、かつてのさとりとこいしは、地霊殿の防衛線で無に飲まれ、やがて袁遺と同様に、この世界へと転生したのである。その能力はそのままにして。

そして、彼女達にとって救いであったのは、さとりもこいしも、妖怪としての恩恵があまりなかったことである。吸血鬼だったものが人間となれば、慣れるまでに時間がかかると言うものだが、彼女達さとの妖怪は、特異な身体能力を持っているでもなく、人の心を読むことが出来ること意外は、人間と同じだったのである。

だから、転生した彼女達の、此度の生が人間であったとしても、そこに何の不自由もなかったのだ。

「覚様く？ 事前情報は必要だと思いましたので、私と羽立とで集めておきましたよ？」

「文が現場を、私が念写で証拠を……ってことよ。天音様の夢を支えるって決めたからには、これぐらいのことはこなさないとね」

「お疲れ様、文、羽立。これで一斉摘発が出来るわね」

会議場へと向かう司馬姉妹を呼び止めたのは、馬隆と賈充の二人であった。馬隆、その真名を文という少女と、賈充、その真名を羽立という少女は、長安の寺子屋にいた書生であった。長安から安定、天水に至るまで、彼女達の記したゴシップ竹簡が見受けられるほど、その筋では有名な少女達だったのである。

その二人が、こうして袁家に身を寄せているのも、偏に、覚との関係が知己であったことにある。馬隆と賈充の二人もまた、かつての幻想郷の住民であったのだ。

かつての射命丸文と姫海棠はたては、この世界でもまた、新聞記者としてその名を上げながらも、自身らの新聞をそこそこ高く評価し、スポンサーについてくれている袁遺には頭が上がらないのである。

そこで、袁遺に交換条件で出されたのが、袁家で働くことである。袁家で働いている間、あらゆる特権を認めるほどの好条件に、馬隆と賈充は飛びついたのだ。

袁遺にも、当然思惑がある。袁遺は、戦争を制するのは情報だと知っていたのだ。だからこそ、情報戦で有利に立つ為に、彼女達の力が必要であったのだ。

「……それにしても、雲行きが悪いですね。一雨来そうですから、空を飛んでは帰れませんね」

「ええ、本当に。まあ、これから雨が降りそうだと思っているのに、何人かを外へと放逐するのですから、私達は鬼なのかもしれません」

ね」

「そんなの、天音様の邪魔を……というか、今まで悪いこととしてきてるんだから、当然の報いだって。お姉ちゃんが責任を感じる必要はないんじゃないの？」

「そうね、小石の言う通りかもしれないわね。……あら、雨も降ってきたわ。これは、私に『心を鬼にして職務を全うし、悪徳官吏を放逐しろ』って啓示かもしれないわ」

会議室の入り口まで、他愛もない会話をしながら、廊下を歩いている司馬姉妹と賈充。窓から覗く夕刻の空は、厚い雲に覆われ、徐々に天気が崩れていることを確かめさせる。やがて、小雨だった天候は、大雨へと変わり、雷を伴い始め、強風が吹き始めた。

賈充は、早々に窓から飛び去った馬隆に、心の中で『ご愁傷様』と手を合わせる。こんな天候では、びしょ濡れになって雨宿りをしている頃だろう。いくら、風を操る能力があったとしても、この悪天候の前ではどうにもならないだろう。空を飛ぶ為に維持している能力を、他に回すことはできないのだ。

「それじゃ、私もお暇させてもらおうかしら。……っと、伝え忘れるところだったわ」

リストを渡して部屋に戻ろうとしていた賈充が、何かを思い出したかのように声をあげた。賈充と馬隆は、悪徳官吏のリストアップとは別に、『幻想郷の住人』を探していたのである。殆どは転生してこの世界に居るようであったが、中々見つからずに難儀していたのだ。

人材登用を袁遺に任されている司馬姉妹には、昔のつながりが非常に大きい。

「益州方面に河童の所在あり。それを差し引いても、益州方面への

介入は悪くない……か」

「益州方面では、劉焉が寝込んでいる間に娘が悪政を敷き始め、家臣団からも不満が出ているみたいだし」

司馬懿は、賈充の渡した益州方面の報告書に目を通して、賈充へとその内容を確認する。益州方面は世が乱れ、国中の至る場所で農民反乱の気が見受けられるようになっていた。

袁家は、民からの支持も高い。いずれ来る戦乱の世を制するためにも、益州方面への介入を筆頭軍師に相談してみるべきか。司馬懿は思案を開始しながらも、悪徳官吏の一斉摘発を行う為に、部屋へと入っていく。

それを見送った賈充は、のんびりとした歩調で、ゆっくりと自室へと帰っていった。

袁遺に仕える者の思惑（後書き）

さて、今話では袁遺に新しく使えるようになった面々の思惑や袁遺への考えを詰め込んでみた拠点のようなお話になっています。

今後は、基本的に合戦と拠点といった内容で投稿していく事になるかと思っています。

今話では、幻想郷からの転生組のうち、古明地姉妹と烏天狗の二人組の所在と、該当する武将が明らかになりました。また、益州にいる河童といえ、そう彼女しかいませんね。

こんな感じで、三国武将の一部が転生者枠で埋まっていきますので、各軍に特殊な武将がいたり、合戦が特殊になったりと色々登場することでしょう。

いわば、架空戦記もの。私は架空戦記物が大好きです。三国志？とか信長の野望とか。私には動画は作れないので、ならばこちらで、なんて浅はかな考えだったりします。

さて、次回はまた別の作品からの転生者をお目見えすることになると思います。

それでは、また次回に会いましょう。

羌対策と馬家の思惑

【雍州・天水】

袁遺が雍州を任されてから、早くも二年が経過していた。袁遺によって施された様々な政策も、一部を除いて徐々に効果を見せている。

無理のないレベルでの税収向上政策と、その見返りに行われる社会事業。職業斡旋によって、職にあぶれて賊へと身をやつす人間も減り、街の陳情を処理するための役所を設けたことで、袁遺達が気付かないレベルでの見直しに役立てていた。

農家も、主食以外のものを同時に生育したりシーズン外で別のものを生育したりすることによって収入も増加していた。それだけでなく、雍州のものの巡りも非常によくなり経済が活性化し、天水は流通の拠点にもなっているほどだ。

天水・長安の二都市に至っては大陸の中でも有数の大都市へと、僅か二年で急成長していったのである。

しかし、急成長によって大都市へと成長した雍州には、まだ解決されていない問題が横たわっていた。領内の賊の数であれば、他の州を格段に下回る一方だったが、異民族の侵攻に悩まされてきていたのだ。

異民族の名前は羌。袁遺は漢の大將軍である何進らに命じられて、羌への対応を一任されていた。その内容の如何によっては、官軍の投入までも認められるという形で。

そこで袁遺は羌への対応を考えるための軍議を開くに至ったのである。

「羌族の侵攻部落に関しては、以前の通り徹底抗戦の主張は変わらないわ。今日訊きたいのは、その枠を羌族全体に広げるかどうか、

よ」

軍議の場に集められた諸将を前にして袁遺はそう切り出した。軍議に呼ばれたのは、軍師の面々と筆頭將軍である張勳、かねてより羌と関わりの深かった筆頭文官の董卓、軍事責任者の張遼である。

その中で最初に口を開いたのは、羌との交易を遂行してきた董卓である。

「羌族との関係は、ここ雍州とは切っても切り離せないものであり、過激派を駆逐した後は講話をもって交易するべきです」

「ボクも羌の指導者が昔のままであれば、その意見に賛同するところなんだけど、現状では徹底抗戦の構えを解けないと思うの」

講話を設け、良き隣人とするべきであるとした董卓の主張に反発したのは、珍しいことに、元董卓軍の軍師でもあった筆頭軍師、賈馱であった。

賈馱は、羌族の指導者が代わったことをあげ、過激派が多数になっていることを懸念したのだ。

「確かに、現状では講話は考えられないのかもしれませんがね。しかし、現行の羌の指導者は、武人でもあると聞き及んでいます」

賈馱の言葉に、諸葛亮が付け足す。諸葛亮はそれに付随して、羌の指導者が武人だけでなく、羌族自体が忠誠心が高いということまで言及する。

「つまり、羌を打ち破ることによって従属させてしまおうと。詠さんと朱里ちゃんは考えているわけですね？」

「そうよ。ボクと月の夢は、天音を天下人にする。そのためには、突破力を有する羌族との融和は必要不可欠なのよ」

陸遜の問いかけに、賈馱は淀みなく答える。普通であれば、天下人を目指すなどという発言は不敬罪に問われるため慎むことだが、袁遺軍勢では当然の思想であった。

袁遺自身が、漢がいずれ倒れるという立場で動いているのだから、それも当然だろう。それだけでなく、彼女達を不敬罪に問うことができる人間などいないというのにも大きな要因である。

「一ついいかしら。異民族を融和政策で雍州に組み込むことの有用性は認められるんだけど、それでは上から何か言われない？」

賈馱の発言に苟？が懸念を示す。苟？の発言はまさにその通りで、雍州は漢の一部なのである。いくら袁家が名家であっても、その施策が評価されていたとしても、権益を欲する漢の高官によって、罷免の口実にされる可能性があることは、間違いがなかった。

しかし、賈馱には確信があった。袁遺には強大な後ろ盾があるからだ。

優秀な軍師に囲まれているという現状に満足しつつ、袁遺は隠されていた彼女の境遇を明らかにし、その疑問への解答としたのだ。

「桂花が懸念することは確かだと思うわ。でも、その点に関しては心配いらないわ」

「天音と月、それに宦官の張譲は古くからの友人関係なの。内部工作と他の宦官、皇帝陛下との折衝が大変らしいけど、天音への支援は惜しまないって約束を取り付けているから」

本来であれば、真っ向から対立しているはずの大將軍と筆頭宦官が手を結び、皇帝陛下の勅命として自由に動くことを認めているために、他の諸侯からの反発も、他の宦官からの追求も、痛くも痒くもないのである。

ついでに言えば、現状の有力諸侯も公孫、孫、曹、馬、袁、劉、陶といったところであり、どの家も、權益さえ手にはいるのであれば、面倒な上に利益もない追求などしない可能性が高かった。

「そういうことであれば、私も詠の意見に賛成です。確実な勝利で、反乱を起こさせないように釘を差す必要もあるでしょう。羌は力関係を大事にするきらいもあるようですので」

「ですが、月さんの仰るとおり、相對する敵を減らす為にも、早い段階から融和政策を採っておくことも大切であると提案します」

少し驚いた表情で荀？が意見を述べ終わると、諸葛亮が発言を許可される。諸葛亮の意見は、賈馱の大方針に賛同しつつ、非戦闘を主張する董卓の意見との折衷案だ。

戦闘が避けられないことも確かではあるのだが、羌の兵の多さは無視できないのだ。交渉次第で味方に引き入れる、最低でも敵に回らない相手を作っておくことは、羌との戦力差を考えれば必須のことである。

「仮に相對することになったとして、霞？ 孫、曹、馬と義勇軍を募ったとして、どれぐらい相手の戦力を削れば楽に相對できるかしら」

「難しいとこやけど……、今の四分の一でも減ってくればかなり優位に立ち回れるはずや」

誼の深い孫、曹の二つは、勅命という形でもって羌討伐戦に参加することが確定している。それに加えて、同盟相手の馬も当然のことながら援軍を寄越すだろう。

その点を鑑みたときに、誼を通す羌の部族をどれぐらいにすればいいのか。現状の軍備から張遼に逆算させ、その報告を受けた袁遺は、董卓に視線を向ける。

「月。交渉する羌の部族の選抜はあなたに任せるわ。できる限り味方に回すか、最低でも不戦を約束させてちょうだい」

「はい！ 交渉役に詠ちゃんを連れていかせてください。必ず天音様の期待に応えて見せます」

董卓は袁遺の命令に喜々として頷き、賈馱とともに何かを相談し始める。これ以上決めることもなくなったと判断したのか、袁遺もそれを咎めることはない。

一通り方針も決まったところで、軍議はお開きになった。移民族との関係も、漢との関係も、皇帝の許しを得ないままに決めてしまふあたり、袁家のスタンスがわかるということだ。

袁家は、いや、特に賈馱はと言った方がいいのかもしれない。賈馱は、羌討伐戦よりも先を見ている。そして、それは軍議の間発言がなかった筆頭將軍の張勳も同様である。

「七乃、詠。益州方面の報告をまとめて提出しなさい。劉焉が病氣にかかって以来、荒れ果てているとのことだけど」

軍議が終わった後に、袁遺は賈馱と張勳を残していた。袁遺の次の目標は益州、劉焉の領土であった。これについては、司馬懿からの上奏であったが、有益なことには違いない。

涼州、益州を含めた国を建てるのが、最初の目標なのだ。袁遺の質問に、二人はかしずいて答える。

「益州は疲弊の一途を辿っているわ。劉焉の名代が相当ひどい政治を行っているみたいね」

「劉焉の忠臣からですら、別の者を王に統べるべしという意見すらあがっているんですよ？」

賈馱と張勳が淀みなく述べると、袁遺は受け取った報告書を開いて読んでいく。劉焉の家臣である嚴顔や張任、法正などが今代の為政者に陳情を行っているようだが、それが煙たがられているのか、次々に州都である成都から外されているというのだ。

「益州のためにも、早急に異民族問題を解決しましょう。漢中の張魯と、益州の牧である劉焉に書を届けましょう」

これではあまりに劉焉が報われないと思ったのか、袁遺は益州への侵攻作戦を決める。かねてより親交のあった劉焉からすれば、好き放題する娘よりも自分をとるはずだという自信があるからだ。

劉焉は仁君だ。漢よりも益州の民を鑑みる女性である。そんな人物から、どうして今代の為政者が生まれたというのか。

かつては母同様に優しくったはずの劉璋が変わってしまった理由は、一冊の書物にあった。黄巾の乱を起こすきっかけとなった一つの書物。太平妖術の書。

それを手に入れてから、彼女は変わってしまったのだ。

何でも手には入る生活を手に入れてから、彼女は傲慢な人間になってしまった。袁遺は罰の当たる考え方であることを承知でこう考えている。

益州を併合する、好機がやってきた、と。

【雍州・天水近郊】

羌討伐戦の共同戦線を支える一角、涼州の馬騰が出陣の準備を進めていた。本来であれば、羌を囲むように、羌の北部に陣を敷いて包囲戦を敷くべきであり、馬騰がその総指揮を採るべきであった。しかし、袁遺は馬騰の天水入りを要求してきた。

馬騰はその要求に戸惑いながらも、自身の代わりを務めることができる？ 徳に北陣の防備を命じると、娘の馬超と馬休、馬鉄を連れ

て天水近くまで行軍していた。

「なあ、お母様？　本当に袁遺を信頼していいのかよ？　羌の討伐戦が終わったら、返す刀でこちらを攻めてくるかもしれないんだぞ！」

馬騰の娘である馬超は、そう馬騰に食ってかかっていた。妹分の馬岱を疑うわけではないが、袁家が勢力拡大を狙っていることが、同盟相手だからこそ手に取るように分かっていた。

袁遺は自身の副官である馬岱に、機密情報をも流している。馬岱は後ろめたさを感じながらも、それを馬家に流していたのである。そうした情報をふまえた上で、馬家も袁家の食い物にされようとしているのではないか、と馬超が考えるのも無理な話ではない。

「くっくくく……。そのときは、迎え討ってしまえばいいだろう。袁家がどんな屈強な兵を用意しようとも、このレイシス・ヴィ・フエリシティ・煌と馬家の兵の前には霞んでしまうのではないか？」
「何を言っているのよ、小鳩ちゃん。袁家の一戦級武将には、呂布とかいるのよ？　……たぶん、すぐにけちらされるわ」

馬超が懸念している、返す刀で袁家が襲いかかってきたらどうするのかという事柄に対し、馬鉄が小さい胸を張って答える。彼女はレイシス・ヴィ・フエリシティ・煌という名前……というわけではないが、突然変異で生まれた吸血鬼である。

その性質があるからこそ、大言壮語に聞こえる発言にも頷ける。彼女を含め、馬超、馬騰は武に優れ、一人一人が並の武将を相手にもしない。やや血気に逸る部分もあるが、武が馬家の強みである。それを支えているのが、馬鉄を宥めている馬休だ。彼女は、馬家としては珍しく、武は磨いていない。溢れ出る才能で馬術や簡単な槍術くらいなら扱えるが、基本的には後方で動く存在だ。

生まれてこの方、知力の方面では、母である馬騰や？徳をも凌駕しているのだ。彼女こそが、涼州の政治と謀略を一人で担っている軍師なのだ。

「星奈の言うとおりかもしれないわね。残念だけど、袁家には勝てないと思うわ。優秀な軍師勢と武に優れる旧董卓軍。どちらも脅威よ……」

馬休と馬鉄の言葉に反応したのは、馬鉄とほぼ同じくらいの大きさの少女である。馬超や馬休に比べると頭二つほど小さく、それでいて逆らいがたい雰囲気擁する少女だ。

「お母様まで何言ってるんだよ！ 袁家に、ウチの西涼騎馬隊が負けるわけないだろ！」

「だからあんたは脳筋だって言われるのよ！ 蒲公英や霞が育て上げた兵だったら、西涼兵にも負けずとも劣らないでしょうが！」

食ってかかる馬超に、少女が一喝する。この少女こそが、涼州馬家の現当主である馬寿成、その人である。馬騰は、馬岱が既に袁遺を主として認め始めていることをなんとなく理解していた。

最初のうちは、かなり深いところまで、自分が知っている情報を流していた馬岱も、時が経つにつれ情報を隠すようになってきた。

馬岱が離反したとすれば、それはそれで仕方がないことなのだ。袁遺がそれだけ魅力的な人物であると考えれば、馬騰としても、プラスの判断材料になる。

しかし、仮に馬岱が敵に回ってしまうとなると、馬家としては自らの弱いところを突かれやすくなるということに繋がるため、頭の痛い問題でもあった。

そこで、少し考え込んでいた馬休が口を開く。

「少し待って。袁家が馬家を滅ぼす手だてだとしたら、どうして天水に呼んだの？　それも、わざわざ兵を多めに連れてくるように、なんて」

「一気に打ち破るためだろ？　私達のことを舐めているだけさ」

その問いかけに、馬超が元氣よく答える。さすがに、馬家の中でも脳筋と呼ばれるだけあって、清々しいほどの受け答えである。

当然、その答えに、頭が痛い馬休は額を押さえながら更に問う。

「それなら、どうしてお母様を呼んだのかしら？　それも天水なんて、袁家のお膝元に」

「くっくく……。行軍の最中に後方より討って破ろうとも思っているのではないか？　愚かなことだ……」

今度は馬鉄が自信満々に受け答える。当然、馬休が求めている回答は、そういった類のものではない。

馬家は全員、袁家と戦闘になることを前提としている。しかし、実は袁家の目的は馬家を滅ぼすことではないとしたらどうだろうか。袁遣は天の御遣いであり、行っている政策から未来の知識があることは想定できる。ともなれば、馬騰を呼んでいる理由は……。

そこまで考えて、馬休は一つの答えにたどり着く。馬休もマニアほどではないとはいえ、そこそこ知識を有していた身。袁遣の元にいる人材は、本来袁家に仕える人材ではない。

「そういうこと……ね」

「星奈、袁家の目論見が見えたの？」

謎が解けたとばかりに、憑き物のとれたような表情を向ける馬休に、馬騰が問いかける。

馬休は、落ち着いた面もちで、馬騰の両目を見つめながら静かに

問いかけた。

「……お母様は、天下を狙いたいのですか？」

その言葉に驚いたのは、馬騰だけではなかった。馬超も、馬鉄も、まさかそのような言葉が馬休の口から飛び出すとは思っていなかったからだ。

まさか、袁家を討ち滅ぼして天下を狙う策があるというのか、と期待に満ちた視線を馬休に向ける。

しかし、馬騰の口から飛び出すのは、それを否定する言葉だと馬休に分かっていた。

「いいや、私は天下には興味はないね。私を慕ってくれる民さえ平和なら、それでいいさ」

「なんでだよ！ 袁家を討ち滅ぼせるんだろ！」

「くっくく……。臆病風に吹かれたか……」

馬騰の発言に、不満を隠そうともしない馬超と馬鉄。案の定の反応に、馬休と馬騰はあきれかえりながらも、二人の言葉を見無視して続ける。

「それなら、袁家とは争いにはなりません。袁家が求めるのは優秀な軍師、文官、武官、そして統治者。袁家が私達に求めているのは、私達自身です」

「ともに民を助けるべく……ということね。実際、袁家の統治力は文官を借り受けているこちらとしても目を見張るものね」

背後で、自身の発言を見無視されて唸っている二人を視界に入れないうで二人は問答する。視界に入れると、頭痛がしそうだからだ。

馬騰には、権力に固執するつもりもないし、民を蔑ろにする今の

漢王朝への忠誠もない。

仮に袁家に降伏勧告をされたのであれば、それを受け入れることも、民を守るためであれば厭わないつもりなのだ。

「まずは袁遺に話を聞いてからね。……いいかしら、翠、小鳩？」

否定する言葉が返ってくるんだろうと苦笑いを浮かべながら馬超と馬鉄に問いかける馬騰だが、いつまでたっても否定の言葉が返ってこないことに驚きを感じる。

馬休が二人に何かを吹き込んでいるのを見て、馬家の扱いが上手くなったものだと思心を感じるのとともに。

「あんちゃん探すの、手伝ってくれるならいいけん」

「くうー！ 強い奴と戦い放題なんて、燃えてくるな！」

相も変わらずの答えを返してくる馬超と馬鉄に、母親として、どこで育て方を間違えてしまったのかと、馬騰は落胆する。

馬休も、軍師、文官としては優秀だというのに、性格には難がある。ほかの三人に比べてまともに育った馬岱も、いたずら娘に育ってしまった。

素晴らしいほどに脳筋に育った馬超。容姿と頭脳以外は色々と残念な馬休。まだ見ぬ兄を求めて、空想に走る馬鉄。

その三人のことを考えると、頭が痛いと思馬騰は思う。

「……お母様？ 聞いていますか？」

そう、頭が痛いのだ。おかしい、視界がぶれる。

馬騰を襲っているのはまやかしの頭痛などではなく、真正正銘、本当の頭痛である。激しい頭痛に、馬騰の視界がぶれ、意識が朦朧とする。

「ちよっ！ お母様！」

「危ねえっ！？」

返事のない馬騰の様子におかしいと思ったのか、馬休が問いかけると、馬騰の体が馬からずり落ちる。馬騰の意識がなくなったのを悟ったのか、馬から落ちるすんでのところで馬超が拾い上げ、自分の馬へと乗せた。

「星奈、母様が！ どうすればいいんだよ！？」

「落ち着いて、翠姉様。ここからなら、天水まで行く方が早い。翠姉様はお母様を抱えながら先行して、袁家のお抱えに治療してもらうべきね」

焦る馬超に、馬休が落ち着いて告げる。兵の統率は、馬超よりも馬休のが上手なのだ。

馬超は短く返事を返すと、一目散に天水に走り出す。その後ろに、馬騰の愛馬を伴って。

小さくなっていく馬超の姿をとらえつつ、普段は警戒をむき出しにする馬鉄が心細く寄り添ってきた。

「お姉ちゃん……、母ちゃん、死んじゃうん？」

「大丈夫、大丈夫よ、小鳩ちゃん……」

馬鉄が寄り添ってくると言う珍しい行為、それも役得な行為であったのだが、このときばかりは馬休も喜ぶことができなかった。

この世界での妹と、母に仕える一万の西涼騎馬兵。頼れる母と姉がいない現状、馬休に重圧が襲いかかる。

「どこで何してんのよ……。私も小鳩ちゃんも会いたいんだから、

さっさと現れなさいよ……」

このときばかりは、少しくらいは泣いても文句は言われないう。馬鉄と抱き合いながら、馬休も久しく見せていなかった涙を見せた。

西涼兵は、いつも気丈に振る舞っている馬休のその姿に周囲の警戒を怠らない。今だけは、軍師・馬休ではなく、一人の年相応の娘として振る舞わせてあげたかったのだ。

だからこそ、馬休の眩きは誰にも聞こえなかった。発した馬休にも、泣いている馬鉄にも、周囲の兵にも。

ただ、一言、涙声で発されたその言葉は、空へと吸い上げられていった。

「待っているんだから……、小鷹」

羌対策と馬家の思惑（後書き）

皆様、お久しぶりで御座います。

今話では、新しく「僕は友達が少ない」のキャラが登場しています。また、小鳩が本当に吸血鬼となって登場しています。

こうした設定の改変は、この世界の根底に関わる物なので、どうしても吸血鬼という存在だけがこの世界に許されているのかは、創造してみてくださいと幸いです。

実際、文、羽立^{はたて}、覚^{さとり}、小石^{こいし}は、能力はあれど、人間になっていますので。

さて、次回は馬家と袁家の同盟をより強固にするお話になります。

そして、超有名で優秀なあのお医者様が登場します。

お楽しみいただければ幸いです。

それでは、また次回にお会いできればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5886z/>

袁家に栄光を！

2011年12月21日14時58分発行